

昭和43年度
(1968)
第8回大会

男子優勝 小樽商業 女子優勝 小樽商業

【 専門委員長 寸評 】

団体戦は男女とも小樽商業の優勝であったがやはり基本技をしっかり身につけた普段の練習が実ったものである。安定した力をもっていた点ではやはり他校より勝れていたように思われる。

又男子では西高、光星高。特に光星高は初参加ながらよく決勝リーグ進出を果たし、その健闘は賞されよう。女子では静修高、南高も進歩が認められたが今一步の感があった。

個人戦は男子では予想通り松原(札南)、倉本(第一)の優勝争いであった。同様に女子の佐藤(札南)にも他をよせつけない強さを感じられたが、もっともっと全体のレベルアップがのぞまれるところである。又男子では佐藤(札西)の進出が注目された。

男子のレベルは次第に上がってきているように見えるが、今一步の所で敗退したのは残念である。実力の面からはそれ程差はないように思われるが実戦面での弱さが目につくようである。特にその中で倉本(第一)・久住・佐藤(札西)の健駒が光った。

女子はまだ本州勢と比較すると、かなりの差があるように思われた。

男女共練習量不足、実戦面での弱さ等これからの課題とし大いに今後を期待したい。

(専門委員長 池畑博司)

優勝のよろこび

男子・女子 小樽商業高等学校

女子団体。静修は、昨年同様優勝候補の最右翼と目されていた札幌南を撃破して決勝にでてきた。本校は比較的楽に予選リーグを勝って決勝に進出した。そして札幌東と3校による決勝リーグとなったわけであるが、まず本校は宿敵静修との激突である。ダブルスで勝ちS1で負けて、またもやS2が勝負となった。これがまたファイナルゲームとなり本校は田中であるが、戦う当の相手は昨年泣かされた同じ相内である。いやな相手である。またあの堅い守備の前に涙を呑むような気がした。多分2-5或いは3-5から田中がよ

く挽回して4-5とし、5-6と押され、やはりダメかと半分あきらめたところが、ここから田中は死力をふりしぼり、相内も負けじと打ってくる熱戦になった。ここで、守備の相内が、田中のペースに乗ったのである。マッチポイントをつかみかけた気のゆるみからであろう。田中は遂に逆転したのである。選手相擁して泣いた。翌日札幌東に2-0で勝ち、4年ぶり3度目の優勝を果たしたのである。優勝回数も静修に3-4と一步肉薄したわけである。

一方男子団体戦は、女子が静修に苦戦していた時には既に優勝が決まっていたのであるが、これは昭和37年の第3回大会の時の札幌南高に対するお返しので進化したのである。つまり新聞の予想などでも優勝候補の最右翼に上げられていた南高と予選のしょっぱなに激突し、これを撃破して決勝リーグでは順調に勝利をものにしたのである。予選リーグの初戦で叩かれた南高の選手は、コートサイドで悔しそうにこうつぶやいていた。

「小樽商業が優勝しなかったら、オレ達は泣くにも泣けない」と

そのとおり、我々は優勝したのである。第2回・第3回の男子第1期黄金時代にも、主として札幌南高に叩かれ泣かされ続けて果たしえなかった男子団体優勝を今年第8回大会において初めて成し遂げたのである。「予定通りさ。」とうそぶいていた所だが、それには余りにも嬉しい勝利である。更に男子の快勝に鼓舞されて女子まで久方ぶりの団体優勝を成し遂げ、第2期黄金時代の口火を切った形になったとあつては、幾ら喜んで喜びすぎることはないだろう。

また記録的にも、同一年度に男女とも優勝の経験をもった学校は本校が初めてである。この点からも今年の「男女共優勝」は、幾ら喜んで喜びすぎることはない勝利である。

(小樽商業高校)

全国高校総体 (第58回全国高等学校庭球選手権大会)

広島